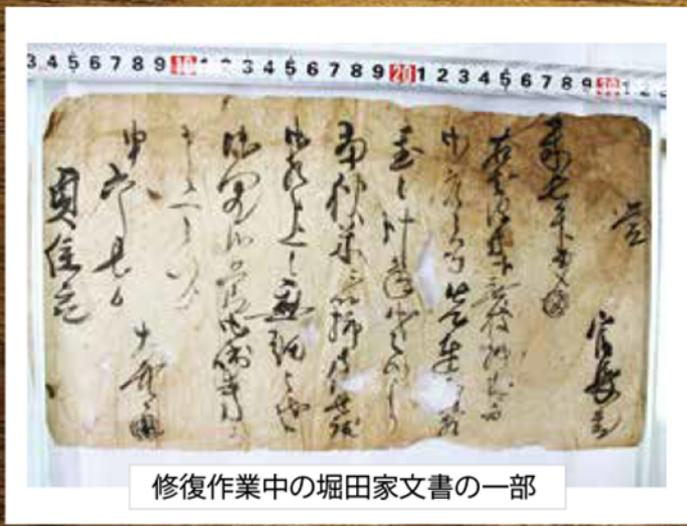


島のむんがたり

丙午ひのえうまに想うく古文書という
タイムカプセルを開く

〈今年は丙午〉

令和8年の幕が開けて2カ月が経ちました。今年は60年に一度巡ってくる「丙午」の年です。実は私自身も昭和41年生まれのプロ午であり、今年ついに還暦を迎えます。しかし3月生まれの「早生まれ」だったため、同級生の多くは一つ上の学年。丙午特有の「同級生が少なく受験に有利」といった恩恵もあまり感じられないまま、青春時代を過ごしたような気がします。



修復作業中の堀田家文書の一部

前回の丙午である昭和41年は出生数が約136万人で、前年の約182万人から25%以上にあたる46万人も減少した年として知られています。翌年には約193万人まで回復しており、「この年に生まれた女性は気性が激しい」という江戸時代からの迷信が、科学的根拠を欠いたまま昭和の社会にまで大きな影響を及ぼしたことに驚きます。

〈貴重な文献資料を後世へ〉

翻って私たちの島を見つめてみると、島内にも数多くの伝承や言い伝えが残されています。しかし、その多くは口伝であり、客観的な裏付けとなる資料が乏しいのが現状です。根拠のない迷信が社会を動かすことがある一方で、真実の歴史が霧の中に隠れてしまうことも少なくありません。

そうした中で、本町が保管する「深見家文書」や「堀田家文書」などのノロに関する資料や複数の「上国日記」といった古文書は、当時の島の姿を物語る極めて貴重な証言者となります。

現在、郷土資料館ではこれらの貴重な資料を次世代へ繋ぐため、一点一点慎重にスキャンニングを行い、長らく眠っていた墨跡をデジタル技術で鮮明にし、デジタルアーカイブで公開するための準備を進めています。特に、焼失などにより傷みの激しかった「堀田家文書」は、補助事業を活用した修復作業に取り組んでいます。

古文書を読み解くためには、かすれや崩し字、独特の筆致により一筋縄でいかない根気の要る作業が必要です。但し、これらの文書が解読されることによって、これまで謎に包まれていた徳之島の近世の暮らしぶりや、先人たちがどのように自然や社会と向き合ってきたのか、鮮やかに浮かび上がってくるはずですよ。

先人が残してくれた「紙上のタイムカプセル」が一つずつ丁寧にひも解かれ、徳之島の真実の歴史が未来へと正しく手渡されるよう、同僚たちのたゆまぬ努力に期待して、還暦を節目に島のむん語りの筆をおきたいと思えます。

(郷土資料館長 遠藤 智)

問 郷土資料館
☎0997-82-2908